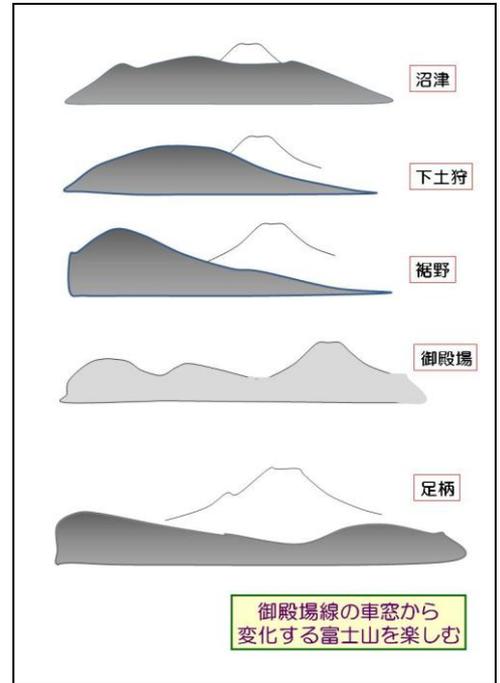


踏み跡 <My Mountains>

富士山麓	愛鷹連峰縦走	No.125
------	--------	--------

愛鷹山（あしたかやま）、その存在すら知らぬ人が多い。
東海道線の旅をしたことがある人なら一度は見ている筈なのだが……。丹那トンネルを抜けるとどうしても富士山に目が向いてしまう。三島、沼津、富士山の手前に黒く大きな山が邪魔をするため美しい富士の裾野が見えなくなる。原、東田子の浦あたりまで来るとようやく雄大で優美な裾野の広がりを含めての大きな富士が車窓に展開する。この沼津で富士の手前に立ちはだかる黒い大きな山が「愛鷹山」である。地図を見ればわかるように富士山の南東にあり、いかにも富士山の一部のように感じられる山である。御殿場線の車窓から見るとさらにその感を強くする。電車が藤岡から御殿場にかかる頃になると富士の裾野は長く尾を引いた後に越前岳を始めとした愛鷹連峰となり、やがて愛鷹山の裾を最後にして切れ落ちている。一方、駿河湾側の富士市あたりから見ると、富士は右肩に宝永火口の突起と愛鷹山の二つのアクセントを付けるようになる。富士生まれの私の目で見れば、愛鷹山の富士山に対する位置は、薬師如来と十二神将の関係にも似た重要な組み合わせとを感じる。富士の南東に位置していることから、冬の季節風からはかなり守られているようだが、駿河湾に面していることから東海道や南岸の低気圧の影響は受けやすいように思う。そんな条件を考慮するなら、強い冬型気圧配置と夏型の天気よりも、移動性高気圧にすっぽり覆われた時が登山適期ではないかと読んだ。



昭和44年4月6日
身軽で気軽な単独行。南武線で多摩川を下り登戸で小田急線に乗り換え、さらに新松田で御殿場線に乗り換え。乗り換える時を利用して食糧の不足分を購入。

御殿場着は13時50分、国立で電車に乗ってから、立川、登戸、向ヶ丘遊園、新松田（松田）と四回も乗り換えて、それでも三時間余で着くことができた。快晴、暖かな日差し、目の前に迫る富士山。バスを待つ間町中を散歩。浅間神社、国道、自衛隊、アメリカ人、……。そして富士山。駅前の雑多な景色と町はずれの雄大な遠望とのアンバランスがこの町の魅力のようだ。バスは16時05分発十里木行。演習場の塹壕の間を縫って土埃を巻き上げながら走る車窓は、日本という狭小な国土を微塵も感じさせない広大無辺な原野。須山を過ぎて道が少しずつ登りに入る頃、愛鷹山登山口というバス停に到着。下車したのは一人だけ。バス道を右手に送り大沢林道を20分、そしてか細い山道に入りさらに30分、昔はここに愛鷹山荘という立派な山小屋があったらしい。今は、穴だらけの屋根と隙間だらけの羽目板だけがかろうじて残っている破屋という表現がふさわしいような小屋。それでも心細くはあれ水も流れており、一夜の宿にするには充分。黒岳のコルに登って富士山を眺める。ここからの富士は今までに見たいくつかの富士と違っている。正面に宝永火口の傷を見せ、甲斐で見た秀麗さは全くない。しかし、ここまで近寄って見る富士にはほどことなく迫力と親しみとを感じる。大きく、横幅も広くどっしりとしている。2800mあたりの大きな帯状の雲と、3000mあたりの長い笠雲とで頂上は見えない。山麓の広がりだけしか見えぬゆえに、さらに一層の大きさを感じる。冷たい北西の風に乗って富士の高嶺から雪が飛んでくる。愛鷹山らしい風情でうれしい。小屋のかまど（誰かが石で作ったらしい、それが人間臭くて気に入った）に火を入れて夕食。今夜のメニューは、御殿場の肉屋で買ったハムでハムサンド、そしてサッポロ味噌ラーメン。日が暮れて木の間須山や藤岡の灯りを見ながら、なかなか尽きない焚火の火に未練を残しつつツェルトに入ったのはもう20時だった。

昭和44年4月7日
起床5時、天気は文句なし。朝食をとり、6時に出発。
昨日富士を眺めたコルに登り、コースを南西にとり約一時間半の登りで越前岳。昨日の夕方は雲に姿を隠し

踏み跡 <My Mountains>

ていた富士山も今朝は全容を現し、わざわざ探す必要もなく目に入ってくる。越前岳を過ぎると尾根は南に大きく下り、富士はしばらく姿を隠してしまう。見えないな、と思っているうちにまた呼子岳への登りに入ると、越前岳の横から少しずつ顔を出してくる。呼子岳 8 時 35 分、富士は越前岳の左側。南に大きく弧を描く駿河湾の海岸線。鋸岳、火山岩が露出した岩場、谷から上がってくる風が冷たい。ホールドも小さく、通過に手を焼く。とは言っても単調な尾根歩きに一点の緊張を加えてくれるアクセント。このあたりはコイワカガミ、コメツツジ、アシタカサクラソウの自生地らしいが、いずれもまだその季節にあらず。位牌岳で昼食と大休止。ここからはもうさしたる登りもなく、南端の愛鷹山までのんびりとしたプロムナード。駿河湾から上がってくる水分が多いせいか、天気の良いのに眺望が薄れてきた。袴腰岳、馬場平、そして愛鷹山。愛鷹山から麓の柳沢まで三時間半の下り。編笠山から小淵沢への下りを思い出しながら……。一時間半ほど下ったところにあせびヶ原という、その名のごとくアセビが咲き臭う平坦地。以降下る道々にアセビが見られる。大きなゴルフ場の横を通り、東名高速道路を潜り、柳沢には 16 時に到着。惜しいことに沼津行のバスは 10 分前に出たばかりで、次のバスは二時間後なので国道まで歩き吉原方面から来た沼津行に乗車。沼津から始発の東京行、やはり東海道線の車内には登山客は数人しかいなかった。

以上

